

学生の声

博士課程進学を振り返って

工学研究科 電気工学専攻 引原研究室 博士後期課程1年 持山志宇

4年生の春、博士前後期連携プログラムによる進学を選択してから、3年半が経ちました。実はほとんど思いつきの決断で、今考えれば無謀だったとも思えます。しかし、少なくとも私にとっては、自分の苦手なことに早くから挑戦するきっかけになったという意味で良い決定であったと思います。

早くに進学意思を固めたこともあり、修士1年生のころ、国際会議での研究発表と、電気系専攻の支援による欧州の複数大学への短期滞在という機会をいただきました。もともと、人前で何かを発表する、さらには英語という慣れない言語でコミュニケーションをとるということは決して得意な方ではなく、正直なところためらう気持ちもありました。しかし、「もう進学を決めてしまったし、将来のことを考えると苦手だからと避けていても仕方ない」と（半ば諦めて？）、頂ける機会はなんでも利用することにしました。ある意味消極的な理由ですが、そのおかげで、せっかくの機会を逃さずに済んだと今は思います。結果として、一度無理矢理にでもやってみれば心のバリアがとれるのか、今では以前ほどの苦手意識は無くなり、海外出張もそれなりに楽しめるようになりました。

自分のやりたいことを自由にやれるというのも、学生の間にはできる貴重な体験です。しかし一方で、あえて自分に負荷をかけて伸ばしていくという視点も、ときには必要です。私の場合、それを研究生生活の早い段階から経験できたことはとても良かったと思います。そのきっかけを与えて下さった電気関係教室の皆様に感謝し、今後も研究に励んでいきたいと思っています。

一人黙々と研究する印象でしたが...

工学研究科 電子工学専攻 野田研究室 博士後期課程1年 吉田昌宏

博士課程というと、研究室に閉じこもり、一人で黙々と研究するものという印象があった。企業からは視野が狭い・専門分野に固執する・コミュニケーション能力が低いなどと敬遠されるといった話を聞くことから、世間からも似たような印象を持たれているのかもしれない。しかしながら、進学して一年ほど経った今、当初抱いていたイメージとは少し異なった過ごし方をしている気がする。研究の進め方についていえば、どちらかというと教員や研究員、後輩の皆でチームとして行っている。課題に対して皆が一丸となり知恵を絞って考え、時間をかけて真剣に議論・対話をする。情熱を傾けることができ、そしてそれに真摯に向き合ってくれる人が周りにはいる環境は非常に貴重であるし、そういった場に身を置けることをうれしく思う。また、企業も交えたプロジェクトが進行している影響でもあるが、大学での基礎研究としてはテンポが速いように思う。これについては博士課程の教育として賛否両論あるかもしれないが、ある意味エキサイティングであり、こういったフェーズの研究もおもしろいと感じている。一方で、立ち止まってじっくりと思案する、あるいは目先の目的以外のことをゆっくり考える時間も大切であり、自分の中の時間の流れとも折り合いをつけつつ過ごしていきたい。

今のところ博士課程に対する一般的なネガティブな見方からすれば、個人的には随分と充実した日々を過ごしているつもりである。残りの時間で一転して後悔する事の無いよう、また今後のキャリア形成においてこの時間が足枷とならないよう、博士課程という特別な時間を楽しみつつもより一層の自己研鑽に努めたい。